

学位審査報告書

新制

人

108

(ふりがな)	いしたに はるひろ
氏 名	石谷 治寛
学 位 (専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 438 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 共生人間学専攻
(学位論文題目)	
レアリスムと幻視 — 一九世紀フランスの調和と自由をめぐる 芸術と美学	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 篠原 資明 副査 教授 岡田 温司 副査 准教授 多賀 茂

(論文内容の要旨)

本論文では、一九世紀半ばから世紀末にかけてのギュスターヴ・クールベやカミーユ・ピサロによるレアリズム芸術の主題や表現をとりあげながら、その表現に関わる一九世紀の身体・自然環境・社会問題をめぐる問題を哲学や美学、生理学・地理学・社会学の言説を通して考察している。本論文の出発点として、近年の欧米の美術史研究や視覚文化研究があげられる。これまで、とりわけヴァルター・ベンヤミン、ミシェル・フーコーが「近代」のユートピア主義をめぐって、大衆文化や知や権力の様態について考察しており、彼らの見解は一九世紀の文化研究の主流となってきた。本論文では彼らの議論では十分に深められていない農村や自然環境の問題と一九世紀絵画との関係に焦点をあてることによって、先行の近代研究を補完し新しい知見をもたらそうとするものである。

近年の視覚文化研究において、近代以来の視覚中心主義が再検討され始めて久しいが、一九世紀の芸術にとってイメージは単に視覚に結びついていただけではなく、より深い身体や記憶、意志や疲労といった時間によって可変的な感覚の水準に結びついていたといえる。生理学者たちは錯覚や幻覚の現象、夢の状態や夢遊病といった病理的な状態を探求するようになり、多くの芸術家たちは、ガシェ医師のような医者とも具体的に交流を育みながら、生物の原初的な衝動や欲求、創造の自発性、人間の真実を見定めようとしていた。一九世紀初頭における精神障害をめぐる研究は、体感や自己の実在感、身体の全体的感覚を表す一般感覚という概念をもとに深められ、やがて一九世紀半ばにはハシッシュや夢遊病の研究によって脳の自動症が認められるようになり、一九世紀末の心理学のなかで意志や注意の疲労が問題化されるようになっていったといえる。こうした一九世紀の生理学を中心とした人間の身体・精神をめぐる問題を、主にジャック・モロー・ド・トゥール、イポリット・テーヌ、シャルル・フェレ、ジャン＝マリー・ギュイヨー、ガブリエル・タルドらの著作を再読することによって明らかにしている。

本論文のもうひとつの特徴は、一九世紀のアナーキズム思想を、芸術家の表現や方法とともに考察することである。プルードンの理論は、エリゼ・ルクリュやピエール・クロボトキンといった地理学者たちに影響を与えたが、一九世紀末までに近代の芸術家に多大な影響力をもったにもかかわらず、芸術研究のなかでこれまで真剣には論じられてこなかった。ルクリュは人類の歴史を自然との闘いと定義し、農村風景に用と美を認め、また生命の象徴として水の循環を軸に地球の生成を描写するエッセイを著した。またクロボトキンは一九世紀末の機械化による農村問題について精力的に論じ、肉体労働と知的労働の連合を訴えた。

こうした一九世紀の人間と環境をめぐる知を通して、クールベやピサロの絵画におけ

る、主題の選択と構図の配置、モデルの身振りと虚ろな眼差しの特徴、制作の身振りと絵画表面の筆触についての見方を提示する。本論におけるそれぞれの章は、数年ずつの時代の幅をもち、ある時代を特徴づけるサロンや展覧会や出来事をめぐって、それぞれ肖像画、裸婦像、静物画、風景画、労働や余暇を描いた風俗画、都市風景などのジャンルの一九世紀絵画が、写真、影絵・人形劇、工芸、映画といった映像メディアやインダストリアル・アートの発展と関連づけられている。またそれぞれの章の背景として、一八四八年の二月革命、一八七一年のパリ・コミュン、一八八九年の革命百周年の万国博覧会、一八九二年のラヴァショルによる爆弾テロ、そして一九世紀末のドレフュス事件などがあり、一九世紀の芸術と同時代の社会的変動との関わりや視点を明らかにしている。一九世紀のパリを中心とした芸術や視覚文化といった余暇産業の成熟は、先行研究において文化資本誕生の基盤、さらには産業や政治のスペクタクル化の基盤として見なされてきた。他方で、近代の都市化の拡大に抗する社会運動のなかで、共同体への志向、地方の文化の再評価、中世への回帰や、さらにプリミティヴィズムの傾向が顕著になってくる。これらの問題が、一九世紀の芸術や美学に散見される調和と自由という概念やイメージをもとに再考される。

一九世紀において調和と自由の概念は、環境の知覚に関わる。調和とは外的世界の知覚と自己の微小な感覚との不協和を通して、それらの関係の統一を自動的にうちたてようとすることであり、自由と進化の条件は、生体が環境から自律・差異化・多様化することである。自然の開発や労働の機械的分業といった新たな社会環境の出現は、かつての調和と自由を急速に切り崩していった。そして新たに時間のなかに再配置された感覚作用のなかで、疲労が不協和を認識するための中心的な概念となる。したがって、調和と自由は、疲労のなかで他者や自己と共感すること、そして機械の時代にも自然にも適合する、単純で簡潔な新しい様式の美の表現を通して、労働と休息、個々の意志と想起、未来と過去のリズムを、均衡させ協調させようとする事となる。

(論文審査の結果の要旨)

一九世紀のヨーロッパ、特にフランスについて語ろうとする者は、誰しも、ベンヤミンとフーコーの言説を避けて通ることはできまい。本論文は、この点で、きわめて自覚的である。しかし、ベンヤミンに対しては、つぎの二つの点で物足りないという。第一に、都市生活に比して、農村生活が看過されがちなこと、第二に、芸術作品についての分析が大雑把すぎることである。これら二つの点を、本論文は補完しようとするのであるが、そのための前提として、「人間に関する探求が始まった」時代という、フーコーの一九世紀観を基本的に受け入れる。この人間の時代は、統一的な宇宙としてのマクロコスモスという見方が廃れ、環境についての新しい概念が登場した時代でもあった。そこで本論文は、調和と自由という概念を、基本的な導きの糸として採用する。人間が環境との関連で語られねばならない以上、古来さまざまに語られてきた調和も、環境との調和として考察されるはずだし、自由も環境に対する自由として考察されるほかないからである。

本論文では、クールベやミレー、モネ、ピサロ、スーラ、ヴァン・デ・ヴェルデといった画家たちが取りあげられている。彼らの絵画における表現や主題が、写真、影絵・人形劇、工芸、映画、インダストリアル・アートなどの視覚文化と関連づけられるとともに、哲学や美学、生理学、地理学、社会学の言説とも関連づけられ、一九世紀の絵画のありようが、広範かつ多角的に浮き彫りにされている。なかでも、クールベとピサロに焦点が当てられ、斬新なかたちで光を当てられている。

たとえば、クールベの場合であれば、肖像画が、同時代人ウェイの写真論と関連づけられるとともに、風景画が、地理学者ルクリュの言説と照応関係に置かれるといった具合である。さらには、ルクリュがアナーキストでもあったところから、同時代の政治思想とも関連づけられる。ルクリュも含めたアナーキズムの思想は、自由と調和を環境との関係において理論化しようとした点で、評価されるのである。クールベによる風景画の連作が、モネやピサロの風景画の先駆となるという指摘もなされている。

本論文が、わけても力をそそいでいるのは、ピサロである。いいかえるなら、本論文における広範かつ多角的な研究は、ピサロへとそそがれることで精彩を放つとともに、ある種の普遍的な意義をもつものともなる。意外に思われるかもしれないが、鍵となるのは、疲労の概念である。一九世紀においては、生物学や生理学、精神医学、心理学などによって、意志と疲労の問題が顕在化していくからである。背景には、自然の開発や労働の機械的分業によって生まれた新たな社会環境もあった。調和とは、環境との不協和を通して打ち立てられるものだとなれば、新しい社会環境のなかでの疲労が、不協和を認識する重要な手だてとなるからである。本論文は、そういったことをピサロの農婦の絵などに巧みに

氏 名	石谷 治寛
-----	-------

読みとるとともに、新しい環境のなかでの調和と自由のありようを、同時代のさまざまな言説のうちに探ろうとする。とりわけ、ギュイヨーやタルドの、社会学と美学にまたがる仕事に着目し、いわば、ピサロの絵との斬新な読みあわせをはかるのである。忘れ去られたかに見える思想家ギュイヨーの読み直しは、新鮮でさえある。調和と自由は、疲労のなかで他者や自己と共感するところにあることを、ギュイヨーのうちに読みとり、求められている芸術とは、自然にも機械化した社会にも適合する、簡潔な様式の美の表現を通して、労働と休息、意志と想起、未来と過去のリズムを、協和させるものだと言破してみせたからである。

確かに、絵画と他の知的文化的諸領域との読みあわせ方には、かならずしも一貫しない部分があるかもしれない。しかし、基本的にはフーコーとベンヤミンの一九世紀観によりながらも、クールベとピサロに代表される絵画を、同時代のさまざまな知的言説および視覚文化と照合させつつ、この時代の調和と自由のありようを環境との関わりのもとで浮き彫りにする試みは、十分に評価されよう。それどころか、クールベの絵とルクリュの地理学的言説、ピサロの絵とギュイヨーの社会学的美学などのめざましい読みあわせによって、本論文は、フーコーやベンヤミンを補完するのみならず、すでに独自の一步を踏みだしてさえいる。以上のように、本学位申請論文は、人間とその社会を環境との関わりにそって解明することを目ざした人間・環境学研究科の理念に適ったものといえる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。